

# 竹内流小太刀極意の書

橋 迫 照

(会員 佐伯市鶴岡町)

当家に伝わる先祖よりの遺品の中に、竹内流の『小太刀入身勝負大意』という巻物がある。上下幅十五、六、センチ全長一メートル七十五センチの巻紙に十二、三字で六十五行にわたり、漢字仮名交じり文で書いてある。読んでみると、おもしろいことが書いてあるので紹介したい。

これは竹内流小太刀の極意書であるらしいが、その基本的精神の有り様を抽象的に示してあるのみで、技術的な詳細は冒頭に、『一体前劍後勢之事』として左足を前に踏み出し体を進め短剣を後ろにして進退するを言い、『是れを竹内流小太刀入身第一の要法也』としているだけである。

私の會祖父、橋迫徳三郎木八が二十二歳の春、元治二年（一八六五）三月二十四日に授与されたもので、本年より約百三十年前の文書である。

本流儀の中興の祖といわれる吉里吞敵齋信武の撰録によるものを、旧臼杵藩士、狭間安大夫盛武と松村角大夫豊重の連名で授与したと書いてある。

後者の角大夫豊重には花押があり、大型の角印が二つ捺印されている。その一つは藤原豊重、花押にある印もてんし篆書で左上から字曰友虎とあり、字名を友虎と曰くか。

また、文書のはじめに捺印される文首印にも篆書で『教活自在』とあるが、教えを自在に活かせという意味であろう。

狭間安大夫は、臼杵市談会より平成七年三月に発刊された『臼杵藩士録』によると、二百三十六番目に、高十五石九斗七升三合 狭間安太郎重亜、二十七歳の祖父、郡奉行役、元高四十俵二人扶持、狭間安大夫盛武とあり、松村角大夫は、同じく二百七十三番目に高十三石一斗七升五合 松村 翠、三十九歳の祖父、蔵奉行役、元高三十俵二人扶持、松村角大夫豊重とあり、ともに劍道場の師範であったのだろう。

次に佐伯市立図書館蔵の『日本武道辞典』（笹間良彦著、柏書房）には、『竹内流』

「本朝武芸小伝」巻の九、小具足の項に、竹内中務大夫『小具足捕縛者伝来久也、専以小具足鳴世者竹内也、

竹内中務大夫者、作州津山城下波賀村人而、小具足之達人也、今謂之竹内腰廻、其末流在諸州、傳書曰

天文元壬辰年（一五三二）六月十四日修験者忽然而来竹内館、教捕縛五而去、不知其所帰、竹内常祈阿太

古神篤憶彼修験者阿太古之神乎、弥敬之信云々、其子常陸助、其子加賀助、繼箕裘（ききゅう）をつぐ祖先

伝来の業を継ぐ、不墜家名、其名遍曰域」とあり、

「武術系譜略」では、

『久盛（竹内中務大夫、作州波賀村人、天文年間小具足の達人也、今謂之竹内流腰廻、末流在于諸州）——久勝（同常陸助）——某（加賀助称「竹内流」）とあり

「武術系譜略」でも大体同じである。

前記『本朝武芸小伝』は天道流の達人、日夏弥助繁高の著にして正徳四年（一七一四）に成り、享保元年（一七二六）に版行され、日本武芸者列伝として最古のものである。干城小伝とも言い、兵法・諸礼・射術・馬術・

刀術・槍術・砲術・小具足・柔術にわたって十巻より成り、流祖を述べて詳しく、明和四年（一七六七）に版行

した『日本中興武芸流祖録』は本書を元としており、以降の武術書は、ほとんど本書を参酌しているという。

久盛は、美作国（岡山県）久米郡<sup>はが</sup>坪和村の生まれ、先祖は鶴岡城主坪和為長とされている。初め久幸といい、西

坪和一ノ瀬城主として一万三千余石を領したといわれる。享録五年（一五三二）六月に西坪和三の宮に参籠修業

したところ、修験者が現れて木刀を二つに切つて小刀として小具足術を教え、また七尺五寸の縄で捕縛する早縄術を教えた。（同流に伝わる『係書古語伝』より）。

これを後に腰廻りと言ひ、捕手に必要な技であるので、

棒・杖・拳・短剣・縄などの武器を用いた武術となり、柔術以前のものであった。

天正年間に備前の宇喜田直家と戦つて敗れ、播磨国（兵庫県）別所に逃れたが再び戻り、晩年は孫の作州

（岡山県）久米郡<sup>はが</sup>稲荷山城主 原田氏に寄寓し、文禄四年（一五九五）六月に没した。

その子 常陸助久勝（二代）が、その伝を受け京都に上つて有名になり、関白秀次に仕え、近衛関白から日下

開山の称を許された。寛文三年（一六六三）九十七歳で卒した。

三代藤一郎久吉は諸国修業のち、寛文三年（一六六三）靈元天皇の上覧に供して、日下捕手開山の綸旨を賜り加賀介に叙された。晩年堺和に戻り、寛文十一年（一六七一）六十九歳で卒した。

門弟五千七百余人といわれ、傑出したものに竹内藤右衛門久定があり、岡山藩では、竹内清大夫正次の系統が備中国（岡山県）生坂藩で継承された。

四代久次の系統は、岡山・生坂藩に、竹内藤大夫久儔の系統は讃岐国（香川県）高松藩に伝わった。

本系からはのちに幕臣吉里吞敵齋信武が出て、関口流・実用流等の各流を採用して柔術吞敵流を唱え、末流の一甫流を参酌した拳骨和尚、竹田物外は不遷流・物外流と称した。

竹内流は柔術以前の姿で、小具足腰廻りと称する捕手技の完成したものであるという。

加賀助久吉の門には、荒木無人斎秀綱がすぐれ荒木流を唱えたが、無人斎は伊丹城主荒木村重の一族といわれ、拳・小具足・捕手・棒・乳切木（ちぎりき）棒の一種で鎖つきのものもあった）・鎖鎌などに長じ、一に荒木無人斎流とも称している。その門人中村行春は竹内三統流

を称した。また、四代藤一郎久次の系統より森霞之助勝重が出て、霞神流を唱えている。一方、初代久盛の門人、二上半之丞正聰は双水執流組腰廻を唱え、一に二上流というが、天和三年（一六八三）高弟田代清次郎則忠に相伝され、その伝は舌間新次郎宗督に伝えられ、のちに双水舌間流と称せられた。

当家に所在する『竹内流小太刀入身勝負大意』の中に出てくる人物に藤一郎久政、藤九郎久蔵の名前は見えませんが、この文面を最初に撰録したといわれる人物の名前が吉里吞敵齋信武俗名藤右衛門とあるので、竹内藤大夫久儔の系統であろうと考えている。これを臼杵藩士である武芸指南、狭間安大夫盛武、松村角大夫豊重が騰写して授与したとなっている。

この要法は初めは初門の弟子でも鍛練をしていたが、藤九郎久蔵に至り何かの謂があったのか、目録以上でかつ、当流への執心の志を見定めてから伝授していたが、いろいろと研究してみたところが、いかなる妙法でもないとも練習に励んでいなければ、その真値は發揮できないだろう。としてある。

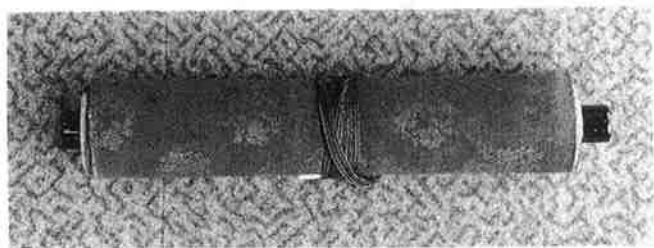
また、その武士の基本は務めて国の干城となることから勇気を養い、武芸を習うことが肝要であり、敵に向かい勝負を決するとき、形を止めてただじっとしているだけでは武芸をならっている甲斐がない。鉄砲の玉のようにねらいを定めて一挙に勝負を決すること。そのために短剣を常時腰に帯びているのだから。ただその動静は心のままに自在に動き、不思議の業が出来るのは日常の鍛練に負うところが大きい。自分の心を無心の水鳥や草木などのような考えをする空理の論は、当流のとらないところである。所謂、勝負に対して逃げるべからず、これが流祖の極意である。

右の一書は自分の杜撰したものではないが、当流の古来よりの相伝の主意である。前文の趣意をよく理解して怠らずに励めば、必ずこの勢いの法の目録を授与するものなり。

吉里吞敵斎信武 俗名藤右衛門

卷末にはこの一書は以前に吉里子勇（しゅう）諱名か）先生の撰録したものであり秘書であるが、熱心なので臆して相伝する。みだりに他人に見せたり言っってはなら

ないと記してある。



極 意 書